

四万十川流域の「絶滅危惧植物」について考えてみませんか？



↑ 四万十川流域に自生するヘツカニガキ

皆様は、この時期に花を咲かせる『ヘツカニガキ』という植物をご存じでしょうか？ 筆者はこの名前を初めて聞いたとき『柿』の一種であると勝手に思いこみ、『クリの実のような花が咲く柿』＝『種；カキ』で探しあぐねました。思いこみとは恐ろしいものです。漢字で書くと『辺塚苦木』。日本で最初に発見された鹿児島県辺塚（ヘツカ）からの由来で、茎葉に苦みがあるというアカネ科の南方系落葉高木、四国九州一部エリアにだけ分布が確認されています。その中でも四万十川流域は重要な生育地になっており、流域市町で数カ所のみ自生が確認されています。残念ながら、近年その数は確実に減少傾向にあるように、高知県レッドデータブック（絶滅の恐れのある野生生物の情報をとりまとめた本）では、『絶滅危惧ⅠB種』（近い将来における野生での絶滅の危険性が高い）に指定されています。また、



↑ 岩場に咲くシチョウゲの花

清流通信読者の皆様こんにちは！

今回は四万十川流域の植物についての話です。

夏本番のこの季節、四万十川流域で見られる植物は沢山ありますが、その個体数を確実に減少させているもの、また絶滅に瀕している『絶滅危惧種』も、残念ながら近年は増加の傾向にあるようです。そもそも『絶滅危惧種』とは何なのでしょう。今日身近な多くの生物は、様々な要因によって個体数が減少し、場合によっては絶滅の危機に瀕しています。生物は進化の過程で絶滅し地上から姿を消すという『自然のプロセスでの絶滅』ということもあるのですが、今日のものはこうしたものとは全く異なります。それは私たち人間活動の影響の下で起こり、人間が絶滅に追いやったものであり、かつてないスピードと規模でその『絶滅』が進行しています。今や絶滅の防止は地球環境保全上の重要な課題になっているのです。



ヘツカニガキの花

やはりこの時期に花を咲かせるシチョウゲがあります。四万十川流域・紀伊半島などに自生する常緑小低木で、準絶滅危惧種（生息条件の変化によっては絶滅危惧に移行する可能性がある）に指定されています。今回、四万十町池田十三生氏の案内でこれら貴重な植物の花の撮影に同行させていただきました。どちらかといえば地味な花といえるのですが、たくましい野生の花です。けれども、自らの運命に抗うすべを持たないこの小さな花たちは、近い将来この世界から確実にその姿を消そうとしています。日本最後の清流と言われて久しいこの四万十川の流域ですら、由々しき状況が進行しています。

四万十川を今夏に訪れる方々は、ヘツカニガキやシチョウゲなどをご覧になるチャンスがあるかもしれません。もしもこの小さな花たちに遭遇されたら、今一度、地球の環境についての思いを巡らせていただければと思います。

トピックス

7月25日は「四万十川の日」

『四万十川の日』は年二回あるのをご存じですか？

一つは数字の『四万十』からとって4月10日、またもう一つは7月25日で渡川が四万十川に正式に名称を変更した日です。四万十川財団では、この7/25四万十川の日イベントとして、7/20(日)西土佐口屋内に於いて四万十川流域の小学生と保護者の方々と、水生生物・透明度等調査と川漁



や水遊びを通じて川に親しむ体験イベント、『親子で四万十再発見・四万十川を学ぼう、遊ぼう』を企画実施いたしました。

当日は朝9時に四万十楽舎前に集合。マイクロバスで四万十川・黒尊川合流点付近の河原に移動し、水質調査からスタート。県環境研究センター、四万十楽舎スタッフの指導の下、清流度計を使っての水生生物及び透明度調査や親子釣り・川漁などなど。お待ちかねのランチタイムでは初めて食べる竹飯や、イタリア人もびっくりのドラム缶ピッツアなどに、大歓声の日でした。

